

6 手を取り合って(推進体制)

■ 計画推進のポイント

1) 計画推進と進行管理体制の構築

地域福祉計画がその目標の実現に向かって着実に進められるよう、市役所内各部局が連携し、また市民との協働を図り、さらに計画推進と進行管理体制を整備することが必要です。

- ①市役所内各部局の連携
- ②市民との協働
- ③計画推進のための体制
- ④計画評価のための体制

2) 社会福祉協議会との連携

社会福祉協議会は、各種福祉サービスを提供する主体であり、さらに、地域における福祉活動の推進とネットワーク形成、ボランティア育成等の中心的役割を担っています。地域福祉計画においても、地域福祉推進の要として行政との連携が求められるとともに、その活動の強化・支援が必要です。

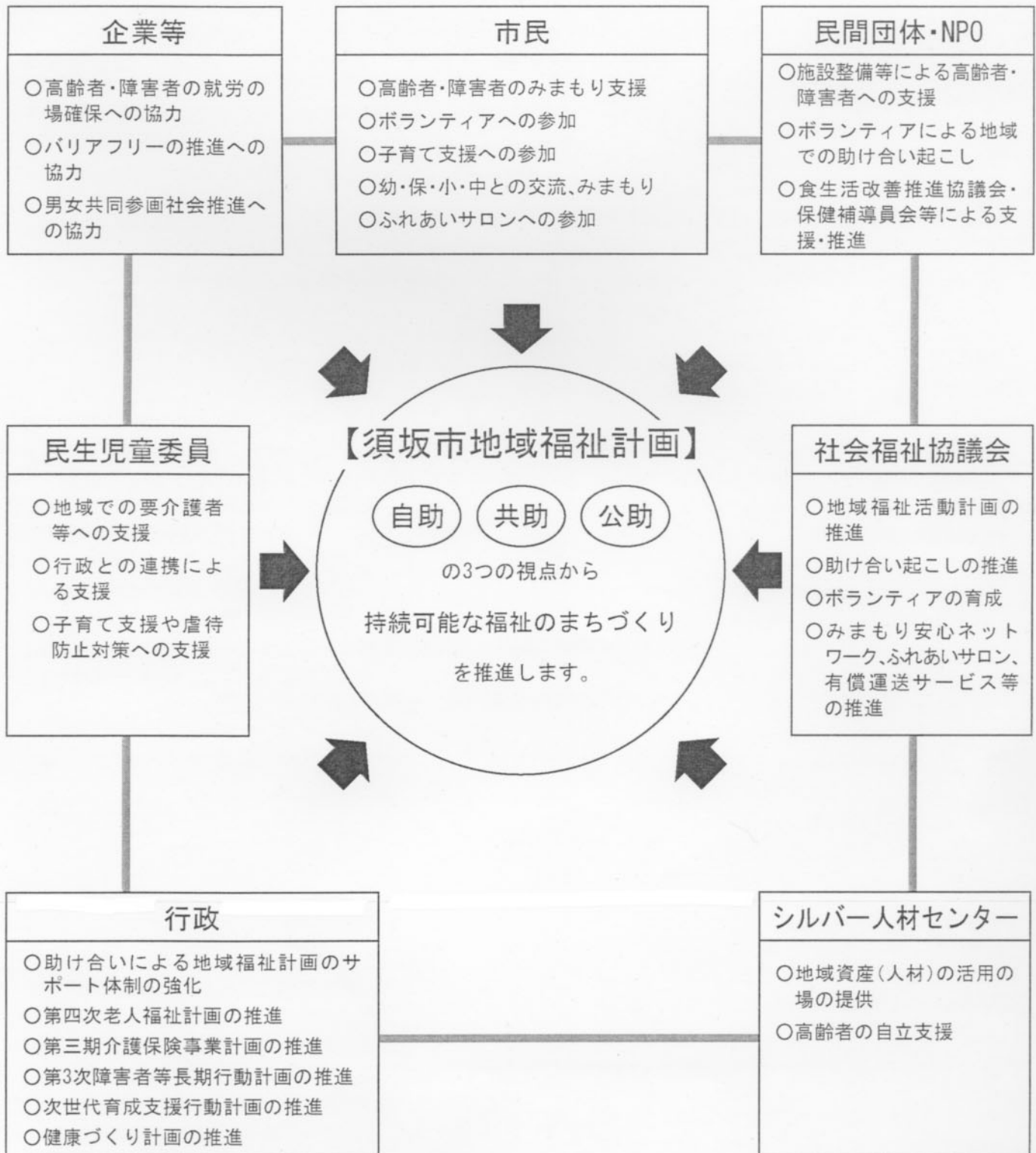
- ①社会福祉協議会の活動強化・支援
- ②地域福祉活動計画「助け合い起こし」との連携と活動支援

3) 関係機関相互の連携促進

地域福祉の推進には、まちづくりの多方面の要素を含んだ活動の連携と活性化が必要です。計画目標実現のためには、行政だけでなく、各種関係機関・団体等の連携が不可欠です。

- ①地域福祉に関係する組織団体のネットワーク形成
- ②民間事業者等と連携した福祉サービスの提供
- ③民間事業者等と連携した地域福祉活動の推進

推進のための連携相関図(助け合いの輪)



互助の地図を作ろう(朝日新聞 平成16年2月16日朝刊掲載 社説)

雪の朝、長野県須坂市で鍛冶屋を営む小林恒三郎さん(73)の家に三々五々、男たちが集まってくる。ボランティアの雪かきを終えたあと、熱いお茶を飲みながら、それぞれの情報を交わすためだ。

自分で雪かきができないひとり暮らしの高齢者の家で、玄関から道路までの道を確保する。安否の確認をかねた雪かきは、60代、70代の男性たち30人で8年続けているボランティア活動だ。

雪かきボランティア活動は、ここだけではない。建設業の男性は機材を使って通学路と生活道路を整備するし、お寺の住職は近くの通学路を整える。知的障害のある人たちは、自分たちが通う施設の近くにあるひとり暮らしのお年寄りを手伝う。

こんな住民たちの助け合いは、市の福祉の中核を担う社会福祉協議会の職員たちも知らなかった。去年秋、職員たちが町世話好きたちを訪ね、2カ月かけて住民の動きを聞き取り、初めてわかった。

ひとり暮らしの高齢者の買い物を手伝っている隣人たち、夜の明かりや車の有無で近隣のお年寄りの安否に気を配っている人、サロンのように常に人が集まってくる家、子どもが学校の帰りに寄り道する家、子どもの遊び場になっているお寺……。

住民の多様な支え合いを手作りの地図に描いてみると、人口5万4千、急速に長野市のベッドタウン化が進む須坂市の現状と課題が浮き彫りになった。

助け合いがある地域とない地域とがはっきり分かれている。助け合う範囲はせいぜい50軒から100軒ほどの狭い地域に限られている。子育て中の母親や若者、子どもへの支援が欠けている、などだ。

社協も市も、地図でわかったことをもとに施設の配慮や福祉サービスのあり方を再考している。まずは産婦人科医院と連携して若い母親たちのグループづくりを進めることや、母親たちが気軽に集まれる場を提供することなどを検討している。

きめ細かい福祉サービスを必要とするところへ的確に届けるために、住民同士の支え合い地図を作ることを勧めているのは民間の住民流福祉総合研究所代表、木原孝久さんである。これまで数カ所の自治体が地域福祉計画の土台にしようと、プライバシーに配慮しながら地図づくりに取り組んだ。住民たちの多彩で隠れた活動を知る有効な方法の一つかもしれない。

高齢者も障害者も幼い子どもを持つ親たちも、だれもが安心して住み慣れたまちで暮らせる。そんな地域福祉計画を作るために、自治体は頭を悩ませている。

私たちが望むものは、住民たちが自分たちの流儀で続けてきたささやかなふれあいや活動をできるだけ生かし、後押しするような計画であり、政策であってほしいということだ。住民たちでできることは住民で。それは経費の節約だけでなく、住民同士がつながりを取り戻す好機にもなる。

私と小鳥と鈴と (金子みすず)

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面(じべた)を速くは走れない。

私がからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

須坂市地域福祉計画

作成 須坂市健康福祉部福祉課
平成18年3月